

小説・江戸神仏歳時記 (18)

とりこえじんじゃ
江戸・鳥越神社

郡 順 史

江戸ッ子（東京ッ子）に生まれて、鳥越神社を知らない者はいない。知らない者は、江戸ッ子の生まれそこないか、余程のお祭り嫌いかもしれな。それゆえ神社名の冠にわざと「江戸」と付けたのである。

では境内からお社に至るまで江戸で指折りの広さと豪華さを誇っているのだらう、と思われるかも知れないが、左にあらず、境内からお社、ついでに神官さんのお家をふくめて敷地はたったの二百二十坪しかないという。

このくらいの敷地を持った個人住宅なら、東京に何百、何千、何万人といるであらう。即ち極めてこぢんまりとした神社なのである。

もともとは鳥越神社は現在地に鳥越山という小高い丘が有って、そこに日本武尊が兵を休めながら東國平定の策を練ったゆえ、威徳をしのんで神社を創建した。鳥越大明神という。

鳥越という神社名、地名は、この丘へあまたの白鳥が来ては休んだり巢をつくったりしたからだという。

この頃から鎌倉、室町時代には、神社の境内は隅田川畔から浅草橋、駒形、三味線堀をふくむ拡大なものであった。

所が徳川家康が江戸へ入府すると、この地の重

要さが着目され、他土地への移転を命ぜられたのである。

附近の神社は厭々ながら権力には勝てず他へ移つて行つたが、鳥越神社の時の神官・銅木胤正は必死の努力を払い、ともあれ残ることを許された。その代わり丘は崩され、土地は召上げられ、現在地の二百二十坪を与えられたのであった。(御府内備考)

神社の神域はせばめられた。しかし御神徳と祭り行事と御利益は遺され、それが年々歳々江戸ツ子の愛着をよび、鳥越神社の祭禮日には何をおいても駆け付け、江戸はむろん全国的にその名を、平成の今日まで知られるようになったのである。

(もしこれをお読みの方で、鳥越神社の名を知らなかった、というお方がいらつしやったら、直に浅草(蔵前)の三筋町の神社へいらつしやつて両掌を合わせてお詫びして下さい)

ところで鳥越神社の御神体はと言いますと、主神に、日本武尊、天兒屋根命、副神として倉稲魂命、菅原道真公、徳川家康公となつている。後に述べるが、それぞれの神さまが、それぞれの特技をお持ちで、それを庶民にほどこし(御利益)て下さるので、それもこの神社の人氣の一つになっている。

さて、では鳥越神社が江戸庶民の人氣を博したそれらの行事とは何であろうか。

一が何と言つても一月八日のトンド焼の行事。あとは二も三もない、当日になると庶民が雲集する行事。一つは(お化け神輿)とも別稱される千貫神輿の渡御。「鳥越の夜祭」とも言われる六月九日の祭禮日になると、氏子総出で、更には肩代わり到他神社の氏子も集まり、千貫もあるうかという大神輿を、夜の明かりの中を掛け声も勇ましく隅田川畔へねり歩くのである。(その昔は、隅田川へ入水したが今は無し)その勇壮活潑さは見ているだけで元氣を貰えると評判である。

その他「茅の輪くぐり」とか「水上祭」とかがあるが、この他に菅原道真公に学問殊して習字上達を祈願するといちぢるしいご利徳をいただけたとある。

それらの諸行事を、噂や伝承をまじえて記してみよう。

まずトンド焼き。これはトンド焼きとも言われ、また左義長ともよび、江戸行事において各地の神社や道祖神で行われ、歴史的には古い。因に子供の焼き菓子として鉄板の上でウドン粉を流しエビや切りイカを乗せて焼き、ソースを付けて食べるものを、「どんどん焼き」と言うが、その語源はこのトンド焼から起こつたと言われている。

もつともこのトンド焼、江戸時代盛んだったと言われているが、享保の頃から(一七二〇)吉宗(將軍)幕府からしばしば禁止の令が出ている。

理由は火事である。小さくほんの落葉を燃やすくらいのもので燃やすなら、火の粉が飛んで火事の原因になることもなからうが、次第に左義長のヤマを高く積み上げるのが自慢の種になり、

「××町では五尺も積み上げたそうだ。」

「その隣の〇〇町では八尺だとよ。こつちも今年には負けちゃいらねえぞ」

年にたった一度の行事だけに、負けず嫌いな江戸ッ子は、江戸中の町々で競い合うようになる。高ければそれだけ火の粉も飛び、火事の原因になる。よつて幕府は厳しく禁令を出すわけである。

ところが取締りの方がゆるやかすぎて、それに年に一度の行事だし、とお目こぼしがあるので伸々やまない。が、吉宗將軍はその点は嚴重な人だったので、末端にまで厳命を下し、取締りを励行した。そのため次第に中止するところが増え、わずかに鳥越神社と数社が行事として行われるようになったのである。

そして殊して鳥越神社のトンド焼が江戸中で評判になったのは、種も仕掛けも有ったからである。その種も仕掛けを述べる前に、一体、鳥越神社は、あの狭い境内でどうやって江戸中の評判をとるほどのトンド焼をやっているのか、百聞は一見にしかずと、初夏の一日、お話をうかがいと拝見に向向いた。

二

鳥越神社の住所は、東京都台東区鳥越二丁目四一。交通も便利で近い。通称を「江戸通り」という國道六号線、つまり大通りに面しているのだ。

JRの浅草橋駅か、都営浅草線の蔵前駅から、どちらも徒歩で十分とはかからぬ。

その日筆者はJR総武線の浅草橋駅で降りて歩いて向かった。天気もよく気持ちのいい日であった。

大通りに面した境内への石段を登ろうとして、「ほう」と立ち止まった。

すぐ眼の前を女性が歩いていて、その女性の襟足が眼にとまったのだ。すごく鮮やかできれいなのである。此の頃はこうした襟足のきれいな女性にはめったにお目にかかれぬ。前のお顔のほうは種々とお手当するが、うしろには余り神経を使わないのだから。しかし筆者などは古い人間なのでしようか。こうした氣のつかない所に氣を使う女性を、こよなく美しく優しい氣性を感じるのだ。

「もしもし」

襟足の美しさに魅かれて、思わず声をかけてしまった。もつともこの女性近所の人で、神社の事もよく知っているだろうから、色々教わったり案内してもらおう、という野心も多分にあったのだ。

女性は立ち止まって、振りかえった。三十歳前後の細面の美人だった。怪訝そうな表情である。

「鳥越神社の取材に来たのですが、色々と教えてくれませんか」

掲載誌の「酒林」を見せてお願いすると、「私の知っている事でしたら……」とにっこり微笑して答えてくれた。

「トンド焼や千貫神輿の行事は、今でも絶やさずにやっているのですか」

「ええ、お祭り日には、何十万人もの人々が来てそれはそれは賑やかですよ。それにトンド焼やお化け神輿さんだけでなく、七月の水上市祭にも十一月の初酉の日も、とにかく祭日には歩けないほど参詣人であふれかえる有様ですよ」

「なるほど、凄いものですね」

歩きながらの間答だから、二百二十坪の境内はすぐ終わってしまう。

本殿に参拝してから質問を続けた。

「しかしこんな狭い境内でそんなに人が集まったら危険ではありませんか」

「ですから警備の人が一生懸命働いてくれているのです」

「トンド焼はどこでやるのですか。大きな左義長だったら火の粉が飛んで、本殿まで焼いてしまうんじゃないませんか？」

「ですから今は小さい焼きで、何度もやるんです。

くわしくは、あそこでお掃除をしているおじさんに訊いて下さい」

そう言つて女性は、笑顔をのこして戻つて行つた。

仕方なく向こうで敷石のあたりを竹箒で掃いているおじさんに近寄り、トンド焼の事を訊いた。

おじさんは竹箒の手を止めて親切に答えてくれた。が、その答えは、さき程の女性と変わらなかつた。変わったのは、その種と仕掛けの部分であつた。

そしておじさんは、トンド焼の行われる場所も、わざわざ、と言うほどではないが、境内の消火栓のある十坪ほどの広場へ連れて行つてくれて、

「此処で行うのです」

と、両手を開けてぐるっと廻すようにして教えてくれた。せめて広くみせようとの心算か。それにしては伸々のユーモア。

「江戸時代は、弾圧と言うと語弊がありますが、取締りがあつたわけではありませんか」

「その通りです。ですが歴代の宮司さんが智恵を働かせて、ご公儀の特別の許しを得たようですよ」

「ああ、それが種も仕掛けものの、種と仕掛けなんです。どんな種と仕掛けなのでしょう？」

「この御祭神の一つに、菅原道真公がおいでなのをご存知ですね」

「はい。知っています」

「道真公は一般に学問の神様として尊奉されていますが、ここの道真公はその上に習字の神様としても尊奉されているのです。いや、むしろその方のご利益で知られているのです」

「つまり祈願をかけると字が上手になる、というわけですね」

「その通り。で、祈願し、毎日字を書く練習をする、すると字を書いた紙がたまります。それをトンド焼の時、年末年始やお正月用品などをお焼きあげをする時に、練習紙とお願いを込めて一緒におたきあげをして貰います。すると更に一層字が上手に書けるようになる、というご利益をいただけるのです」

「なるほど。それでお焼きあげの火は小さく、何度も作り焼く。火が小さく火の粉が飛び散らないから、幕府もまあいいだろう、と許可というより黙認していたのですね」

「黙認かどうかは判りませんが、そのお陰で江戸の名物行事が続けられてきたのでしょうかね」

三

これでトンド焼の由来はほぼわかったが、あと神社にまつわる来歴伝話伝説などを知りたいと思っ

ご創建のきっかけはこの丘の上に日本武尊がお立ちになり、はるか房総の方を眺められて（筆者注・多分房総の海に身を投じられて御身代わりになられた愛妻弟橘媛のことを偲んでおられたのであろう）住民たちは、そのお姿、そのお心をおもんばかつて、白鳥がよく飛来していたので白鳥神社を創られた。その後、白鳥より海鳥やその他の鳥が群翔するようになったので鳥越と名を替えたとか。

とにかくご創建が日本武尊ゆえ古い、今を去る二千年以上昔といえる。その後永承年間（一〇四六）に奥州征討に向かった源頼義・義家（八幡太郎）の親子が、この神社の神徳を聞き及んで祈願に立ち寄った。そのお陰を以て大川を渡りかねていたのが、一羽の白鳥が飛来してきて、大きな声で鳴き乍ら浅瀬を教えてくれ、源親子は一兵も傷つけることなく、兵士を対岸に渡すことが出来た、という。

社名を鳥越大明神とよばれるようになったのは、この故事があつてからだ、という説もある。

これによつて武神との噂も生まれ、鎌倉時代から室町（戦國）時代には、関東の武者はむろん東北、越後の戦う人々の信仰を集め、社運はいよいよ隆盛をきわめ、境内も現在の浅草橋から駒形あたりまでの拡大にひろがっていった。

だが、徳川氏が江戸へ入るようになり、徳川氏

の都市企割により縮小されてしまったのは、前述の通りである。

しかし神社側はそれを怨んではないようだ。

徳川家康がご祭神の一柱になっている如く、徳川家では代々、罪ほろぼしの意味もあつてか、破格の手篤い保護援助を神社に加えたのである。

そうした伝話伝説もさる事ながら、ではこの神社さんは、熊さん八さんの如き庶民にはどんなご利益をくださるのであろうか。

この附近で和菓子屋さんをやっている古い友人が面白い話をきかせてくれた。

その庶民へのご利益を下さるのは、一つは鳥越夜祭りに売られるお化け神輿の絵馬。二つ目はざるかぶりの犬。更に「鳥越の犬張り子」の御守りというのがある。これが面白い。

「お化け神輿の絵馬」を求め、一年間家の中に飾っておくと、奇怪な出来ごとに見舞われないし、たとえ病氣になつても軽くすんでしまうのだ、という。

面白くて愉快なのは「ざるかぶりの犬」である。これは日本全国を探してもどこにもない。ここだけの物である。

小さなざると犬と、いづれも竹で編んだのであるのだが、ざるを押すと犬が笑つて見えるのである。その笑顔のひょうきんで可愛いこと無類である。しかもこの笑い犬は、安産子育てのご利益があるというのだから、一体誰が発明したのだらうと感

心してしまふ。その一方で、竹で編んだところに、子供が竹のように素直にすくすくと育つようにとの祈りも加えられているというのだから秀逸この上なしという所。

もう一つの犬張り子、これも笑い犬と同様安産育児のお守りであるが、笑い犬ほどのひょうきんさはないが……。

以上、江戸の鳥越神社の概要であるが、今回もお参りさせて戴いて、日本には色々なご利益を下さる神社神さまが有つて、本当に日本に生まれてよかつたな、という感想を抱いたものだった。

— 次回は、曹源寺（かっぱ寺）の予定 —



■讃岐装飾瓦(表紙説明)

立体的で豪快。複雑で繊細。讃岐装飾瓦の技術が結集されたこの作品は、全長四メートルにもなる。三十センチから四十センチの二十部品に分解される。

神内 俊二(じんない・しゅんじ)プロフィール
一九五一年

●高松市常磐町生まれ

二〇〇三年二月二十日

●讃岐装飾瓦伝統工芸士としての認定を受ける。

香川県木田郡三木町池戸一〇六四一五

TEL・FAX／〇八七―八九八―四二五六

「酒林」随筆特集 第七十七号

平成二十一年一月一日号

発行人 西野 信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市亀井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、「一報下さい」。